

## 令和5年度 奈良市立平城こども園 研究実践概要

園長名 小川原 由美子

全園児数 116名

### 1. 研究主題

自分らしさを発揮し、生き生きと活動する子どもを目指して  
～しなやかな心と体を育む～

### 2. 研究年度

初年度

### 3. 研究主題設定理由

本園の子ども達は、人懐っこく素直で真面目な子どもも多いが、新しいことへの取り組みや失敗に弱く、大人への依頼心の強さも感じられる。また、ここ数年間、コロナ禍で人とかかわる機会や体を動かす機会が制限され、同年代や年下年上の子どもとかかわることが少なくなり、友達よりも大人とのかかわりを好む傾向が見られたり、体幹が弱く、体の使い方のぎこちなさが見られたりする。そこで、柔軟に対応できるしなやかな心やその場に応じた様々な動きができる身体を育むための保育内容や環境構成、援助の仕方を探っていきたいと考え主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

様々なひと・もの・こととのかかわりの中で自己肯定感をもち、自分の居場所を見つけ、「たのしい」「もっとやってみたい」と感じながら一人一人が生き生きと活動するために必要な環境構成や援助の在り方を探る。

#### ②研究の重点

- 一人一人の子どもの姿や発達を捉え、発達に応じた体の使い方ができるような活動を考え工夫する。
- 互いの良さを認め合い、安心して自分の思いを出せる雰囲気づくりをしながら、人とかかわる楽しさが感じられるような環境構成や援助の在り方を探る。
- 研究主題について職員相互で共通理解を図り、「ひと・もの・こと」とのかかわりの中で興味関心を広げられるような保育内容の充実に努める。

#### ③活動の方法

各学年の実践事例を挙げ、遊びや活動の中で生き生きと活動する子どもの姿を以下のように示し、子ども達のしなやかな心と体を育むことに繋がる場面を分析した。

生き生きと活動している子どもの姿 援助・環境構成 ← きっかけとなった要因

【事例1】 「今日も登り棒したい！」(3歳児10月)

クラスの友達が登り棒を取り組む姿を見て興味をもったA児。何度か自分でやってみようと思いましたが、難しくてなかなか思うよう

友達の姿を見て興味を持ち、自分もやってみようとする。

に登れず困っていた。その様子を見た5歳児のB児が「どうしたん？」と保育者に尋ねた。保育者がA児の困っていることを伝えると、B児は「じゃあ私が教えてあげようか？」と言った。A児に「お姉ちゃんが教えてくれるって。やってみる？」と尋ねると首を縦に振って頷いた。B児が「最初はこうするねん」とやり方を伝えると、A児はしっかりとB児のを見ながら真似てやってみた。一生懸命取り組むA児を励ましながらし少し手伝うと、半分以上登ることが出来た。B児と保育者が「出来たやん」「やったね！」と喜ぶと、A児は嬉しそうに笑顔を向けた。その後外遊びの時に「今日も登り棒したい！」と何度も繰り返し取り組む姿が見られるようになった。また、A児は「最初はこう？」「次はこうして…」とB児が教えてくれたことを思い出して取り組んでいた。

異年齢児に声を掛けてもらうことでもう一度挑戦しようとする。

異年齢児や保育者に登り方を教えてもらったことを意識してやってみる。



出来た！という達成感を味わったことで繰り返しする姿に繋がった。

#### <考察>

- ・最初は見よう見まねでやってみようとするが、登り方が分からずなかなか登れずにいた。しかしB児に足の使い方や登り方を教えてもらいことでイメージしながら体を使うきっかけになったと考える。登れるようになった後も教えてもらったことを思い出しながら手や足の使い方を意識して登る姿に繋がった。
- ・2学期になり少しずつ友達を意識する姿が増えてきた時期だったことで自分もやってみようと思うきっかけになった。また保育者が傍にいたことで安心して異年齢児と関わり、「やってみよう」「難しいけど頑張ろう」と諦めず取り組む姿に繋がったと考える。

#### 【事例2】 「橋がおれた」(4歳児11月)

友達と一緒につくった船を浮かべたい！という思いから砂場に穴を掘っている。ところが船が大きすぎて、浮かべるところか穴の中に入らなかった。「もっと穴を大きくしよう」と周りに三角コーンを置き工事ごっこが始まる。

数人で穴を掘り進め大きくしていくうちに穴が深くなり「橋をかけよう」と穴の上に少し厚みがある板と薄い板を2本かける。穴の上を渡るときはその板の上に乗って渡っていた。「いい橋ができたね。落ちないように渡れるの？」と声をかけると渡ったりジャンプしたりしながら板のしなりを楽しみ、得意そうに渡っている。しかし、1人で乗っている時は渡れた橋も、数人乗ると薄い方の板がしなり、「ボキッ」と折れてしまう。子どもたちは「あっ！」と顔を見合せている。それを見ていた保育者が「どうしてつぶれてしまったのかな？」と考えられるように問いかけると、A児「乗ったからや」と話す。保育者が分厚い板を指さし「こっちにも乗ったけどつぶれてないよね」と分厚い板に子どもが乗っているのを見ながら伝える。A児「こっちは木やからちがう？」B児「いっぱい乗ったからかな？」と、木を見ながら確かめそれぞれが考えたことを口々に話し出す。保育者は分厚い板を指さし「でもこっちも同じように乗っているのにつぶれてないよね。なんでだろう？」とどうしてそうなったのかが考えら

友達と協力しつくったからこそ思いを共有し、一緒に遊びを進める姿になった。

自分のイメージに合った用具が選べるよう環境を整えたことで必要なものを選んで使っている。



気の合う友達と遊んでいることや友達と話し合うことを積み重ねたことでそれぞれが自分の考えたことを話している。

れるように伝える。しばらく考えると板の分厚さが違うことに気づき「こっちの方が大きい」「だから折れなかったんや」と分厚い方の板に乗って繰り返し試している。

数人乗ると板がしなるため「もっと強いやつ探してこよう」とみんなで体育倉庫に向かい、たくさんある用具の中から巧技台鉄棒を持ってくる。穴に鉄棒をかけ通ると「これやったら大丈夫や」「強いもんや」と嬉しそうに話し、棒が細いためさらに慎重に渡ろうとしていた。

普段の遊びの中で園にあるものを把握し自分達の経験から強いものはどれかと素材の特性などを考える姿に繋がった。

#### <考察>

- ・友達と一緒に自分たちの思いを出し合いながら大きな船をつくったことで、「船を浮かべたい」と友達と同じ目的で遊びを進め、協力しながら穴を掘る姿が見られた。また、一緒に遊ぶ中で友達の思いを聞いたり自分の思いを伝えたりしながら思いを合わせる経験を重ねてきたため、互いの思いを出しながら遊ぶ姿に繋がった。
- ・穴に橋を架けたことで、バランスを取りながら慎重に橋を渡っている。数人橋に乗ると板がしなり、揺れることを楽しんでいた。また、細い巧技台鉄棒を選び橋にしたことで、よりバランスをとって渡る姿が見られた。子どもが考えた遊びの中でバランスをとる、力加減を考えるなどいろいろな体の使い方ができるように声を掛けることの大切さを感じた。
- ・上手いかなかったときに試行錯誤できるような言葉掛けや自分の考えたことが実現できるよう、様々な用具の中から自分の思いに合った用具が選べるよう環境を用意したことで、遊びの中で、いろいろな素材や用具があることを知り、その性質を考えながら自分の思いに合った用具を探す姿が見られた。

#### 【事例3】 「当番活動」(5歳児 5月～)

進級し、年長児としてはりきって遊びや生活に取り組んでいる。しかし椅子に真っすぐ座れない、足を組んでしまう、給食では肘をついて食べるなどの姿があり、遊び(サーキット遊び、組体操、チャレンジタイムなど)や生活の中で体を使うことを意識した活動を取り入れてきた。

クラスの話し合いで当番活動の仕事を決め、グループごとに当番活動に取り組んでいる。当番表を意識して見るようになり、「今日は〇〇グループがぞうきんやから、バケツに水を入れに行こう」と、友達と声を掛け合ってバケツに水を入れている。雑巾を絞り、部屋の床を雑巾がけしたり、ゴミ箱等の荷物をよけて拭いたりしている。ドアのさんの部分は「こうやったら(ゴミ)取れるで」と雑巾を細くして拭いたり、ティッシュを用い、つまんでゴミを取ったりするなど、友達に教え合う姿が見られる。汚くなった雑巾を友達と見せ合い「見て、こんなに汚くなった」「僕もこんなに黒くなったで」と笑っている。保育者にも見せ「すごい黒くなってるね。隅の方までよく気がついたね」と認められたことでまた、自分たちなりに考えて気づいたところを拭いている。掃除が終わり、当番がバケツの水を捨てに行く際、「重いから誰か手伝って」「いいよ、せえの」と、力を合わせてバケツを持ち上げ、流しに水を捨てる。

当番活動の内容を自分達で決めたことで責任をもって取り組もうとする姿。



友達が意欲的に掃除をしている姿を見ることで刺激を受けて自分もやってみようとする。

友達と雑巾を見せ合い、きれいになった満足感を味わうとともに、保育者に認めてもらったことでまだどこか汚れている場所がないか探る姿に繋がった。

当番活動を始めた頃は、前に転びそうになったり友達とぶつかってしまったりすることも多かったが、雑巾がけを年間通して取り組んできたことで、今ではそういった姿は見られなくなってきた。

## 【考察】

- ・重いバケツを友達と運ぶように意識して言葉掛けを行ってきた。「せえの」と友達とバケツを持ったり持ち上げたりするなど、友達と息を合わせたり力を調整したりする経験が培われている。
- ・安心して自分の思いを出し、「手伝って」「いいよ」と受け入れてもらったり、きれいになった事を認めてもらったりすることで、より意欲的に活動する姿に繋がっている。
- ・おそうじタイムとして毎日取り組んできたことで、ぞうきんを絞る時には手首をひねる、床のぞうきんがけをする時には、踏ん張ったりバランスを取ったり、また友達とぶつからないように予測して動いたりするなど体をコントロールする力が育まれている。

## 5. 研究の成果

- 遊びの中で、保育者が体を動かすことが楽しくなるような活動を取り入れたり、周りや友達からの刺激を受けたりすることで「楽しい!」「できた!」という達成感が運動遊びに挑戦しようとする意欲が育まれた。また、保育者が個々に合った言葉掛けや援助をすることで子ども達もより意識しながら体を使う姿が多くなってきた。子どもの課題や発達を捉え、活動の内容を考えながら日々積み重ねることで体をコントロールする力が養われてきている。今後も、自分なりに目標をもち、挑戦しようとする過程を大切に見守りながら、楽しんで運動遊びができるようにしていきたい。
- コロナ禍で交流できないことが続いてきたが、今年度は異年齢との交流を多くもったことで、真似たり、教え合ったりしながら互いに刺激を受け意欲的に活動する姿が増えた。3歳児は保育者に自分の思いを話し受け止めてもらうことで安心し、4歳児は友達と一緒に思いを出し合い、友達や保育者に認めてもらうことで友達とかかわることが楽しくなり、5歳児は友達と協力しながら物事を遊びや活動を進めていく中で友達との繋がりが大きくなるなど、それぞれの経験が積み重なり、友達とかかわって遊ぶ楽しさが感じられるようになると考えた。
- 発達段階を考え、職員間で意見を出し合いながら体を使う遊びや活動ができるよう子どもが使いやすい環境を整えてきたことで、自分のしたい遊びやイメージに合った用具や遊具を選び、組み合わせたり、素材を考えて選んだりするなど子ども達が意欲的に体を動かして遊び、生き生きと活動する姿に繋がった。また、遊具の近くにチャレンジカードを掲示したことで子ども達が自分なりの目標をもち挑戦していた。保育者が子どもの挑戦を見守ったり励ましたりすることで諦めずに何度も挑戦し、一人一人が達成感を感じる事ができた。

## 6. 今後の課題

- 体の使い方が考えられるような活動となると、子どもが主体的に活動するというよりは保育者側が意図して設定する活動が多くなりがちだった。今後は子どもが遊ぶ中でも、いろいろな体の使い方ができるような環境や援助を考えていく必要があると思った。
- いろいろな方向から子ども達の姿を分析したいと考え、研究主題を考えたが、サブテーマが大きく、分析することが難しかった。次年度はもう少しポイントを絞って研究を深めていきたい。